

# 蛇抜けと法螺抜け

——天変地異を起こす怪物

齊藤 純

## 1 蛇抜け

昭和2年(1927)執筆の柳田國男「鹿の耳」(『一つ目小僧その他』所収)に、新潟県岩船郡の大利峠、別名「蛇骨峠」「座頭峠」の伝説が記されている。それによると、付近の山中に長く棲む大蛇が近々海に出る。その際、一帯を水に沈める。これを大蛇の化身から聞かされた座頭は、同時に知った大蛇の弱点「鉄の釘」とともに村人に教えた。そのため大蛇は退治され、村は助かった。こういう話だが、続いて次の一節がある。

信州では山に<sup>ほら</sup>法螺崩れと蛇崩れとがあった。蛇崩れの前兆には山が<sup>おびただ</sup>夥しく鳴るので、直ちに<sup>ひのき</sup>檜木を削って多くの<sup>くい</sup>榧を作り、それをその山の周囲に打ち込むと、蛇は出る<sup>あた</sup>こと能はずして死んでしまひ、年経て後骨になって土中から出る。それを<sup>けんまつ</sup>研末して服するときは<sup>おこり</sup>瘡病を治すなどともいった。<sup>1</sup>

長野県を中心に、中部地方の災害伝承を扱った笹本正治『蛇抜け・異人・木霊—歴史災害と伝承—』によると、「<sup>じゃくず</sup>蛇崩れ」という言葉は元和(1615-24)頃成立の『甲陽軍鑑』などに用例がある。しかし、同地方でよく聞かれるのは「蛇抜け」である。土石流を中心とした斜面崩壊のことで、近代以前の人々はこうした天変地異は大蛇の仕業と考えた。年を経た大蛇が風雨を呼び、大地を抜けて海に出た、昇天したなどと伝え、蛇は竜になるともいう。中には、神仏や大蛇自身が現れ、その危険を告げたという話もあった。笹本は、宝暦9年(1759)の文書「木曾御材木方」の中の「崩れ 蛇抜跡」の説明を引いて、この言葉が近世に遡ることを示している<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 柳田國男『定本柳田國男集』第5巻、筑摩書房、1968年、210-211頁。

<sup>2</sup> 笹本正治『蛇抜け・異人・木霊—歴史災害と伝承—』岩田書院、1994年。同書は「蛇崩」「蛇抜」の用例について、次のように記す。

『甲陽軍鑑』品第十四には、「土は重宝なる物にて、田地家をも、土の上に作り、人を助ける物なれど、自然岸ぎわなどに、風を防ぐとて、家持ちたる者あるに、霖にて、じゃ(蛇)崩れして重宝なる土が、必ず人を殺すは、過ぎてあしき事なり」とある。方言からして山梨は蛇抜がある地域であるが、ここでは「じゃ崩れ」と出てくる。「じゃ崩れ」という言葉は、『武将感状記』巻之五十の長篠合戦で、大久保忠世が士卒の騒ぎ立てたのを鎮めた

「蛇抜け」は『日本国語大辞典』に記載され<sup>3</sup>、「①大雨などで土砂の崩れること。山崩れ」を意味する方言とされる。使用地に、山梨県、長野県飯田市付近、東筑摩郡、岐阜県恵那郡があがり、このあたりの言葉のように思える。

しかし、「蛇抜け」はもっと広い範囲で使われていた。昭和38年(1963)、國學院大学民俗学研究会が兵庫県城崎郡竹野町(現・豊岡市)で行った民俗調査の報告書に、次のような記述がある。

七月の巳の日にはセキリョウさんを祀る。蛇抜けに祭るのだという。今ではセキリョウさんは石地藏さんで、大昔、ここには蛇がすんでいたの、石地藏を立て、セキリョウさんを祭るようになったのだという。(川南谷)

セキリョウは、ふつう「石竜」と書く。岩石を神体や依り代にして祀られた竜神のことである。これを「蛇抜けに祭る」「蛇がすんでいたの、祭るようになった」という。このあたり意味がどうもわかりにくい、次の話をみると、土石流のような災害があって、その跡地に祀られたものらしい。

この村の山奥の大沼、小沼には蛇が住んでいるという。香住やミカワあたりでは、蛇ヌケとって、三日間も四日間も地なりがするが、この蛇が大沼、小沼から抜け出て里におりるのだという。昔、ミカワ部落は、この蛇ヌケのために、沼の水で流されてしまったことがあった。<sup>4</sup>

文中のミカワは、兵庫県美方郡香住町(現・香美町)の三川。竹野町の川南谷から西に尾根を越したところの、谷間の集落である。

一方、群馬県の民俗学者・地名研究者である都丸十九一の『地名のはなし』を読むと、同県にも、ジャグエ(蛇崩)・ジャバミ(蛇喰)・ジャヌケという地名があった。都丸によると、崩壊することを県下で「クエル」といい、それが名詞化したものがクエだが、ジャグエという地名は断然多く、長々と蛇の腹のように岩盤を露出

---

とき、「折しも二三日雨降り続き、夜に入りて、川岸俄かに崩れて水中に落入る音夥し、これを俗に蛇崩と曰ふ」とも出てくる。『松屋筆記』はこの蛇崩れを「沙崩れの義也」としているが、蛇抜と同じで「蛇崩れ」だろう。／ところが、宝暦九年(一七五九)六月の「木曾御材木方」の中には、「崩れ 蛇抜跡」として次のような説明がある。／山の欠ケ口大石等落重なり候を崩れと申候、或ハ蛇抜跡と申候、或ハ小砂・小石交りの崩れも有之候、凡蛇抜と唱候ハ山奥の谷所々欠損し、大夕立の時分一旦ニ水筋を築埋メ候付、山奥より流れ出候谷水相滞り、水勢甚盛ニ成り築埋候所を押切、又々大石等有之所ニ而一さゝえ持堪、水上の水弥増し候節再び押切り、大石・大木をも押流し損亡仕候儀ニ御座候、尤山の形勢ニ依而蛇抜の可有山者、大雨の節ハ予其心得をも仕候儀ニ御座候。／木曾地方ではこの言葉によって、雨が降ったあとの土砂崩れ・土石流を、特別な意味をこめてこのように呼んでおり、どんなに遅くとも宝暦期までには概念もできあがっていたことが知られる(52-54頁)。

<sup>3</sup> 『日本国語大辞典 第二版』6、小学館、2001年、1151頁。

<sup>4</sup> 『民俗探訪』昭和38年度号、國學院大学民俗学研究会、1965年、101頁。

し、あるいは岩石が転がっていることからついたという。また、同様の小溪をジャバミ・ジャヌケといい、「ジャバミの方はジャグエと同様な地貌だと思うのだが、ジャヌケの方は、土砂の流出を伴っているように感じられる」と記す。さらに、台風による洪水をジャオシと呼ぶ例をあげ、こうした洪水によって押し出された跡がジャヌケだと判断している<sup>5</sup>。

静岡県の安倍川上流にも「蛇抜沢」「新蛇抜沢」といった地名がある。『静岡県史別編2 自然災害誌』によると、「蛇抜け」とは土石流のことで、これが起きる前には蛇が現れる、すなわち「蛇が谷筋から抜け出す」ことに由来する。また、濁流が谷を流下するさまを下流の平野から見ていると、まるで蛇がのたうつ様子に似ているからだともいう<sup>6</sup>。

さらに、秋田県北秋田市の阿仁には「ジャヌケ森」という山がある。春日克夫「阿仁町の地名について(1)」によると、ジャヌケは「山抜け、がけくずれ地の意」で、「地元でジャクズレ、ジャタクレなども似た意味で使っている」という<sup>7</sup>。

都丸は群馬県のジャヌケ三例をあげていたが、たまたま筆者が目にした例として、京都府京都市右京区京北下黒田町にも「蛇抜谷」があった。「蛇抜け」はこうした小地名として各地に残るようだ。なお、『日本国語大辞典』は、先の「蛇抜け」の解説で「じゃんぬけ」という高知県土佐郡の用例をあげ、「②大雨が降ること」としているが、土砂崩壊の原因としての大雨と考えられる。また、崩壊との関係は不明だが、青森県三戸郡階上町の松館川に「蛇抜穴」という洞窟があり<sup>8</sup>、少なくとも、地下の大蛇が大地を抜けて現れるという観念があったことがうかがえる。

## 2 蛇崩・蛇喰と大蛇

「蛇崩」も地名として各地に残っている。地名辞典をみると、「じゃくずれ」と読むものに、蛇崩（福島県耶麻郡山都町）、蛇崩川（東京都世田谷区・目黒区）、蛇崩れ（新潟県小千谷市片貝町）がある<sup>9</sup>。「じゃぐえ」と読む例は検索できなかったが、都丸は群馬県の四例を示し、他にも多いと述べている。また、『日本国語大辞典』は「じゃく」を見出しに掲げ、「①山などの崩れること。また崩れた所」を意味する方言とする。使用地は山形県、福島県、茨城県、栃木県にわたり、類例に長野県佐久地方の「じゃぐえ」があがる。「じゃく」は「じゃくえ」のつづまったものと考えられ、少なくとも東日本には「じゃくえ」「じゃぐえ」が広がっていた。

「蛇喰」は「じゃばみ」と読み、地名辞典で次の例が検索できる。

<sup>5</sup> 都丸九十一『地名のはなし』換乎堂、1987年、82-83頁。

<sup>6</sup> 『静岡県史 別編2 自然災害誌』静岡県、1996年、697頁。

<sup>7</sup> 春日克夫「阿仁町の地名について(1)」『秋田地名研究会年報』2(1986年)、7頁。

<sup>8</sup> 『日本歴史地名大系 第2巻 青森県の地名』平凡社、1982年、105頁。

<sup>9</sup> 『日本歴史地名大系』平凡社、1979-2005年；『角川日本地名大辞典』角川書店、1978-1990年を参照した。なお、これらで検索した市町村名は出版当時のもの。

蛇喰（北海道松前郡松前町白坂）、蛇喰堰（秋田県本荘市子吉）、蛇喰（福島県大沼郡会津高田町）、蛇喰・蛇喰池（群馬県藤岡市鮎川）、蛇喰城（千葉県安房郡富山町平久里下）、蛇喰（新潟県岩船郡関川村）、蛇喰（富山県東砺波郡井口村）、蛇喰池（三重県阿山郡伊賀町山畑）、蛇喰城（和歌山県西牟婁郡上富田町・白浜町）、蛇喰川（島根県伯太町）、蛇喰山（島根県松江市）。

静岡県の安倍川上流の梅ヶ島（静岡市）にも「蛇ばみ崩」があり、文久3年（1863）11月の「梅ヶ島入島両村絵図」に描かれた多くの崩壊地の一つにこの名がついている<sup>10</sup>。

これらのうち、北海道の松前町白坂の「蛇喰」は興味深い例で、享保12年（1727）の古文書や寛政元年（1789）の菅江真澄の紀行「えみしのさへき」などに「蛇喰」と記されているのだが、現在は「ジャヌケ」と呼ぶという<sup>11</sup>。都丸十九一は14世紀の『神道集』に記された「蛇喰池」をあげ、ジャバミは古い中世的な言い方だろうと記しているが、少なくともジャヌケより一段前の言葉らしい。

蛇崩・蛇喰も、蛇抜けと同様、大蛇が崩壊地形を作ったという考えにもとづく地名である。これに関して、奈良県吉野郡下北山村に伝わるノヅチの伝承が興味深い。同村では、太さのわりに短く、上からマクテ（転がり落ちて）来る蛇がいるといい、これをツチノコヤノヅチと呼ぶ。この蛇について、同村上桑原で次のような話が聞き取られていた。

ノヅチがノー（カリバ）に居れば、そのめぐり一帯は草が生えぬ。地原のしもの国道の上に丸い形と四角い形の草の生えぬ所があり、それはノヅチのオンとメンがいるからだと言ったが、台風の時ヌケたことがある。ノヅチは山で千年、海で千年して天へ昇るが、人に見られたら出世できぬ。これがあるとヤマヌケして、川の水と一緒に海へ出る。浦向のクエ（崩壊）もそれだったという。<sup>12</sup>

この話を記した昭和48年（1973）『下北山村史』所収の「地形用語」によると、ノーは「野」「カリバ」ともいって、斜面の採草地のこと。ヤマヌケは山崩れ、地<sup>すべ</sup>りを指す。ヌケとは、崩壊またはその箇所、局部的に崩落することをヌケルという。一方、クエは、ヌケに対して広範囲の崩壊に用いられている<sup>13</sup>。

ノヅチ・ツチノコは、現在では未確認生物の一種だと一般に思われている。しかし、かつては山野の霊的なヌシで、異形の蛇の妖怪だった<sup>14</sup>。このようなノヅチがいて、草が生えないという斜面（ノー）は、たびたび崩壊が起こり、常に表土が流されるような場所だったと考えられる。

<sup>10</sup> 前掲注6、606頁。

<sup>11</sup> 『日本歴史地名大系 第1巻 北海道の地名』平凡社、2003年、300-301頁。

<sup>12</sup> 木村博一編『下北山村史』下北山村、1973年、979-980頁。

<sup>13</sup> 同上、991-995頁。

<sup>14</sup> 伊藤龍平『ツチノコの民俗学—妖怪から未確認動物へ』青弓社、2008年。

### 3 法螺貝の怪異と今切いまきれの起こり

「蛇抜け」と同じような天変地異を、法螺貝の仕業だとする伝説がある。地中にいた法螺貝が風雨を呼び、怪音を発して海や天に抜けたというのである。伝承は各地にあり、近世には浜名湖いまきれの今切の話がよく知られていた。

今切は静岡県の新居町（現・湖西市）と舞阪町（現・浜松市）の間にあり、浜名湖が外洋と通じる湖口部にあたる。これは明応年間（1492–1501）の地震・津波で海岸線が切れたもので、それまでは川によって、現在よりも西方で海とつながっていた<sup>15</sup>。この川に架かっていたのが、歌枕で有名な「浜名の橋」である。つまり、今切は中世の津波でできたのだが、近世になると多数の法螺貝が山を抜けてできたものと伝えられていた。元和2年（1616）、江戸から京都に向かった林羅山の紀行『丙辰紀行』に、次のように記されている。

遠州荒井の浜より奥の山、五里ばかり海となりて、大舟も出入る事、むかしは山につゞきたる陸地なりしが、中比山なかごらよりほらの貝おびたゞしくぬけ出でて海に入りける、其跡かくのごとく海となりて、今切と名づくるよし、古老いひつたへたり。<sup>16</sup>

この記述は、万治3、4年（1660、61）頃の刊行と推定される『東海道名所記』、あるいは元禄10年（1697）の『本朝食鑑』など、多くの地誌や本草書に引用されていく。

かつては、この法螺貝が抜けたという跡も残っていた。元禄2年（1689）の井原西鶴の道中記『一目玉銚せんねん』巻三に、「千年山」という見出しで次のように記されている。

むかしほら螺かいの貝飛出し跡とて右のかたあとに谷崩たにくずれて見へし此下に白洲した有爰しらすぞ橋たへは絶ても。<sup>17</sup>

『一目玉銚』は蝦夷から長崎までの名所案内記で、巻二・三は江戸から東海道を經て大坂への道中を記す。記述は先行の地誌類、中でも『東海道名所記』の抜粋に、

<sup>15</sup> 今切の現実の成因については諸説があるが、明応7年（1498）8月25日の大地震による津波だとする説と、この地震で地盤が沈降していたところを襲った翌8年6月10日の高潮だとする説が主流。ほかに永正7年（1510）8月27日の高潮に言及する説もある（『静岡県史 別編2 自然災害誌』静岡県、1996年、96–101頁、309–324頁）。榎原雅治『中世の東海道をゆく』（中公新書、2008年）は従来の今切成立説を見直し、明応7年（1498）8月25日の津波が原因であり、地震による沈降はなかったとして、それ以前の旅日記や紀行文を参照しつつ海岸の地形を新たに復元した（79–109頁）。

<sup>16</sup> 幸田露伴編『文芸叢書 紀行文編』博文館、1914年、409頁。

<sup>17</sup> 頼原退蔵ほか編『定本西鶴全集』第9巻、中央公論社、1951年、218頁。

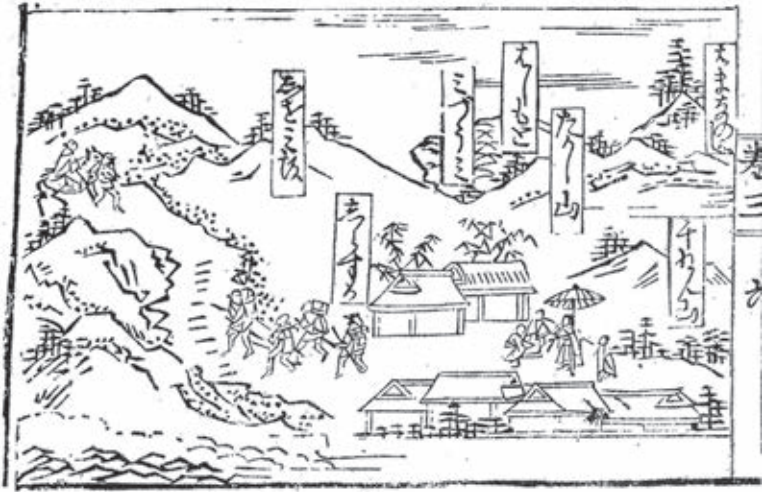


図1 『一目玉鉾』巻三「千年山」付近  
 (顯原退蔵ほか編『定本西鶴全集』9、中央公論社、1951年より)

西鶴の旅の見聞などを交えたもので<sup>18</sup>、東海道の情報は貞享年間（1684-88）の様子を反映していることが知られている。今切付近の名所・施設は、舞坂、今切入海、御関所、荒井、千年山、浜名橋、高師山、白須賀の順に記され、これによると、新居宿から浜名橋のあった橋本あたりの東海道の右側に、法螺貝が飛び出して崩れたという谷があった。その下の白洲（砂浜）が、絶えた浜名の橋の旧跡だということから、現在の湖西市浜名橋本の北方の山らしい。

『一目玉鉾』には挿絵があり、「千年山」付近も描かれる(図1)。ただし、狭い画面に収めるため「はまのはし（浜名の橋）」「はしもと（橋本）」「みづうみ」などは、画面の奥に折り曲げたように描き込まれている。それほど正確なものには見えず、大体の目安として、画面右手すなわち東から、「はまのはし」「千ねん山（千年山）」「たかし山（高師山）」「しらすか（白須賀）」の順に名所が続いていたという程度の理解でよいだろう。

なお、白須賀の宿場は、当初、潮見坂の下、現在の湖西市白須賀の元町にあった。それが、宝永4年（1707）の地震・津波で大きな被害を受け、坂の上の台地に移転した<sup>19</sup>。挿絵をみると、「しをみ坂（潮見坂）」の下に「しらすか」があり、元禄2年（1689）の出版なので当然だが、移転前の状態である。ちなみに、新居の関所と宿場も、元禄12年（1699）の暴風雨と宝永4年（1707）の地震・津波で害を被り、

<sup>18</sup> 岸得蔵「細見『一目玉鉾』—旅日記の問題をめぐって—」『国語国文』10（1958年）、251-261頁；同『一目玉鉾 駿河国志』『静岡女子短期大学紀要』5（1958年）、47-74頁；高橋俊夫「『一目玉鉾』と『東海道名所記』」『近世文芸』15（1968年）、11-20頁。

<sup>19</sup> 静岡県教育委員会文化課編『静岡県歴史の道 東海道』静岡県文化財保存協会、1994年、277-280頁。



図2-1 『東海道分間絵図』第三帖「荒井」「白須賀」間  
(国立国会図書館デジタルライブラリーより)

二度の移転を経験した。当初の関所と宿場は、現在知られている場所より南東の、今切に突き出た砂州の上、現在の湖西市新居町新居の港町・柏原付近にあった<sup>20</sup>。

一方、元禄3年(1690)の遠近道印作・菱川師宣画『東海道分間絵図』も、第三帖の「荒井」と「白須賀」の間に、「ほらがい」が出たという場所を記している(図2-1・2)。ちょうど、「大くらと」と「あらいだし」の間の位置で、「大くらと」の上方に「とうしんじ」の表示があり、その左の山の上に「此山より昔／ほらかい出候」と記されている。

「大くらと」は、湖西市新居町浜名の大倉戸で、「とうしんじ」も同地の東新寺。その左だから、東新寺の西方の山である。「あらいだし」については不明だが<sup>21</sup>、その「あらいだし」の上方に「なき松」という松があり、「此松道中一の／大松也／なき松と云／昔切んといへハ／人の声して／なきたるよし」と記されている。この「なき松」に



図2-2 『東海道分間絵図』第三帖「荒井」「白須賀」間  
(部分拡大、国立国会図書館デジタルライブラリーより)

<sup>20</sup> 『特別展 新居関所・新居宿の変遷 I 元禄・宝永災害による移転について』新居関所史料館、2007年。

<sup>21</sup> 富士昭雄(校訂・代表)『東海道名所記／東海道分間絵図』(叢書江戸文庫50、国書刊行会、2002年)は、「あらいだし」を現在の「新町カ」とする(308頁)。湖西市白須賀の新町の読みは「しんちょう」だが、かといって付近に適当地名はない。



図3 湖西市浜名橋本の浜名橋旧跡付近からのぞむ東新寺西方の山々（筆者撮影 2014.3.31）

ついても、特に伝承は残っていないが、いずれにせよ、「あらいだし」の左に「白須賀」の宿場が描かれており、移転前の白須賀、すなわち現在の湖西市白須賀の元町と、同市新居町浜名の大倉戸の間の、旧東海道の北側の山が、「昔ほらかい出候」という山である<sup>22</sup>。『東海道分間絵図』は、当時においては格段に正確な地図であり、法螺貝の出たとされる土地が、実際に付近にあったと考えてよいだろう（図3）。

近代の民俗学者も、このような伝説を報告している。よく知られているのは、昭和12年（1937）の柳田國男編『山村生活の研究』中の、「村の大事件」に記された次の話である。

東京府檜原村の如きも多く此種の惨話を伝えて居るが、土地の人はホラガヒが山を抜け出ると山崩れが起ると謂って居る。山崩れの原因を此怪異に帰するものは決して檜原村だけではなく、第一章に述べた富山県上平村旧桂部落千軒が山崩れの為に殆ど全滅したといふ伝説にもこれがあって、此所では其化物が山川海に各千年住み其処から出る時に悪業を働くものと謂って居る。埼玉県浦山村ではヤマツナミの前兆に大蛇の現れたことを謂ひ、青森県赤石村には自宅背後の大木を伐った為に大山崩れの災厄を招いたことを述べて居る。<sup>23</sup>

<sup>22</sup> 文化財のしおり編集委員会編『地名が語る新居』（文化財のしおりシリーズ第4集、新居町教育委員会、1982年）によると、該当地付近に「大欠（オーガケ）」という小字名があり、「この辺の山は今でも崖くずれ危険地域に指定されているが明応の大地震の時にこの山が崩れ、浜名川に大量に流れ込み、河口を止めたのが今切の誕生に結びついたのだと思われる。でもその昔は、山がミシレテ（むしられて）できた土地をみんなで一畝づつ分けあったなどと伝える」と記している（34頁）。興味深い推定で、「大欠」が法螺貝の抜けたという伝説の土地であった可能性は高い。ただし、それから想定される斜面崩壊が実際の今切の成因だったとは考えにくく、むしろ別の時期に大欠付近であった崩壊が法螺貝の仕業と認識され、さらに今切の起源とも結びついたのだろう。

<sup>23</sup> 柳田國男編『山村生活の研究』民間伝承の会、1937年、11頁。



富山県東砺波郡の上平村（現・南砺市）<sup>かみたいら</sup>で、「山川海に各千年」住んだ法螺貝が天変地異を起こしたという伝説があった。他にも、怪異を起こす法螺貝は年久しく生きたものという伝承があり、『一目玉鉾』が記す「千年山」の地名は、このような観念にもとづくものと考えられる。

今でも法螺貝が抜けたという場所が残っている例もある。愛知県岡崎市の真福寺の境内に「ホラ貝の穴」という穴があり、昭和11年（1936）の『岩津町誌』には次のように記されている。

往昔伊勢の海より地下をくゞり来つたほら貝 真福寺境内にて七日七夜鳴動して後天に昇ったといふ その抜穴が現に存在してゐて土地の人ほら貝穴と云つてゐる 此のほら貝大き三斗七升入と云ふ。<sup>24</sup>

真福寺は矢作川の東の山間の天台寺院で、本堂の下に湧く霊泉を本尊の水体薬師として祀る。境内は山中の盆地状の土地にあり、その南側の小さな尾根の中腹に「ホラ貝の穴」がある（図4）。脆そうな花崗岩の崖に開いた穴で、高さ約2m、幅約3m、奥行き4～5m程。穴の前から溝状の窪みが斜面を下り、穴への登り道になっている。穴は掘り窪めるなど手が加えられていて、当初のままではないようだ。平成13年（2001）3月26日、筆者が訪れた時には、登り道の傍らに次のような看板があった（図5）。

ホラ貝の穴／ 往古此の地帯まで海であったためか、この穴よりホラ貝が掘り出され、この貝を吹き進軍すれば、勝利を得ることができたと古記に記されている。穴中に地蔵尊を祭る。



図4 岡崎市真福寺境内のホラ貝の穴  
（筆者撮影 2001.3.26）



図5 ホラ貝の穴の看板  
（筆者撮影 2001.3.26）

<sup>24</sup> 加藤錫太郎編『岩津町誌』岩津町役場、1936年、359頁。

看板には法螺貝が抜けた話は記されていないが、同じ場所にまつわる伝説のバリエーションとして興味深い。

#### 4 法螺抜け

以上のような法螺貝の怪異を「法螺抜け」と呼ぶ。だが、現在、この言葉を聞くことはほとんどない。『日本国語大辞典』にも「ほらぬけ」の項目はなく、地名辞典でも検索できない。しかし、明治43年(1910)の『風俗画報』第50輯「大日本名所図会」第76編「東京近郊名所図会」をみると、日暮里の道灌山であった事件について「法螺抜け」の項目を掲げ、次の記事を載せる。なお、事件の日付は、正しくは明治4年(1871)7月20日である<sup>25</sup>。

明治五年八月二十五日とかや。午後大雷雨あり。道灌山北崖の一部崩潰し。其跡穴を成したり。当時法螺が抜けたりとの評判なりし。俗説に法螺千年山に住み。時至りて昇天すと伝ふ。法螺抜けといへるは是なり。素より信ずるに足らざるものなれども。評判高かしりしものなれば。こゝに附記す。<sup>26</sup>

また、近世、平戸藩主だった松浦静山が、文政4年(1821)から天保12年(1841)の没年直前まで書き綴った『甲子夜話』に、次の記述がある。

又世に宝螺<sup>ほうら</sup>ぬけと謂て、処々の山半俄に震動して、雷雨晦冥何か飛出るものあり。是を宝螺の土中に在る者此如しと云へども、誰も正しく見し者もなし。これ亦蛟の地中を出るなりと云。<sup>27</sup>

この他、『雑排語辞典』が「ほらぬけ 法螺抜」という見出しを設け、「深山の法螺貝が空をとび洞穴となると」と解説する<sup>28</sup>。このように、近世の雑俳に「法螺抜け」の用例があり、以下、俳諧研究の助けにより筆者が知り得た例を列挙しよう<sup>29</sup>。

<sup>25</sup> 齊藤純「道灌山の法螺抜け一瓦版の怪異譚とその背景一」『世間話研究』13(2003年)、47-82頁。

<sup>26</sup> 田中市之助編「大日本名所図会」76、「東京近郊名所図会」1、『風俗画報』50(1910年)、35-36頁。

<sup>27</sup> 松浦静山(中村幸彦・中野三敏校訂)『甲子夜話』4、平凡社、1977年、148頁。

<sup>28</sup> 鈴木勝忠編『雑排語辞典』東京堂出版、1968年、880頁。

<sup>29</sup> 鈴木勝忠ほか「『俳諧木の葉かき』輪講 一七」『季刊古川柳』49(1986年)、5-6頁;同「『俳諧木の葉かき』輪講 一八」『季刊古川柳』51(1986年)、19頁;同「『俳諧木の葉かき』輪講 二一」『季刊古川柳』59(1988年)、9頁;多田光「『法螺抜』余説他」『季刊古川柳』73(1992年)、14-16頁。これらの研究に多くの恩恵を蒙った。

- ① こたつを出れば法螺ぬけの穴（『俳諧觸』明和5年 [1768] - 天保2年 [1831] 頃刊）
- ② ほらぬけの山<sup>か</sup>歟子供の出た巨燧<sup>こたつ</sup>（『東宰府天満宮奉額狂句合』嘉永6年 [1853] 序）
- ③ 土瓶が破れてしばし法螺抜ケ（『俳諧觸』）
- ④ 隣村まで法螺ぬけの泥（『俳諧觸』）
- ⑤ もゆる草なき法螺ぬけの跡（『俳諧觸』）

① ②は法螺抜けで山腹に穴のあいた様子、③④は法螺抜けによる洪水と泥水、⑤は荒れた崩壊地の様子を詠んでいる。これを「法螺荒<sup>あれ</sup>」とも呼んだことは次の句でわかる。

- ⑥ 法螺荒以来夏枯<sup>くさ</sup>の艸（『俳諧觸』）

「法螺抜け」という言葉はないが、この現象を詠むものに以下の句がある。

- ⑦ 山も崩<sup>くず</sup>れて出る螺貝<sup>ほら</sup>（『三番続』宝永2年 [1705] 序）
- ⑧ 螺貝ぬけて新しい谷<sup>ほらがい</sup>（『俳諧木の葉がき』明和4年 [1767] 序）
- ⑨ 法螺抜てこのかた山へ舟都合（『俳諧觸』）
- ⑩ 螺ぬけてより替る渡し場<sup>つごう</sup>（『俳諧觸』）
- ⑪ 螺抜て水にかつえる滝の末<sup>ほら</sup>（『俳諧觸』）
- ⑫ 三日程うな<sup>つんぼ</sup>って抜けた螺の貝（『俳諧觸』嘉永元年（1848）再興本）
- ⑬ 法螺ぬけて聾だらけの麓町（『金砂子 上』宝暦4年（1754）成立）

⑧からわかるように、法螺抜けの跡は穴や谷になった。⑨⑩は洪水の結果。⑪は土石流で堆積した土砂が流れをせき止めたのだろう。⑫⑬をみると、貝が抜ける時には轟音を発する。法螺貝の怪異がどのようなものと理解されていたか。それがわかる資料である。

ちょうど、昭和32年（1957）の『桜井町史 続』に次のような記述がある。奈良県桜井市東部の粟原地区<sup>おうぼら</sup>の地形に関するもので、「洞」という漢字を当てているが、同様の理解が残っていたことを示すものである。

この谷筋も文化十二年、「粟原崩れ」の名で伝えられる山津波があつて、相当な被害をうけているが、古来、幾度か、こうした事柄が発生している。土俗では「洞<sup>ほら</sup>がでる」という言葉であらわされ、大雨続きのあと、山の中腹が崩れ、猛然と地下水を噴出する様子をいう。<sup>30</sup>

<sup>30</sup> 『桜井町史 続』桜井市、1957年、5頁。

「<sup>ほら</sup>洞」の当て字も理由のないことではなく、先に紹介した昭和48年(1973)『下北山村史』の「地形用語」には次のような説明がある<sup>31</sup>。

ヌケ 崩壊またはその箇所。局部的に崩落することをヌケルという。ヌケの起  
点のクボミはホラヌケ。  
ホラヌケ ヌケの上端のくぼみ。

地域によっていくらか意味の相違はあっただろうが、「法螺抜け」とされる崩壊現象の特徴の一つが、洞穴状の痕跡であったことがよくわかる。こうした特徴が、穴を意味する「ホラ」の語に通じ、さらに同音の「法螺」のイメージを引き寄せたのだろう。さらにいえば、崩壊時の鳴動も、楽器である法螺貝を連想させたと考えられ、あわせて異変に伴う多量の出水が、出来事と海とのつながりを思わせたと推測される。

## 5 法螺貝と竜蛇

法螺抜けの貝は大蛇になるともいう。昭和2年(1927)の『牟婁口碑集』によると、和歌山県西牟婁郡白浜町では次のように伝える。

西富田村の大池から昔法螺貝が出た。申の歳とかの大水の時、日も七つ下がり  
のころ、漲り流れる大水の中に黒い大きなものの浮いて行くのを見た。する  
と後に池に洞穴が出来ていた。法螺貝は海に寿を保ち神通力を得て大蛇となり  
殻を抜けて出るもので、その大水の時三千年経た法螺が出たのだという。<sup>32</sup>

ちょうど、明治4年(1871)に起きた道灌山の法螺抜けを記す瓦版があり、見ると、竜のようなものが殻を抜け、黒雲の中に舞う姿が描かれている。また、天保12年(1841)の桃山人・竹原春泉斎の妖怪画集『絵本百物語』は、暴風雨の中、竜状の生き物が貝殻から顔を出し、水を吹きながら濁流を流れ下る「出世<sup>ほら</sup>螺」の図を載せる(図6)。いずれも再々紹介しているので<sup>33</sup>、ここには後者だけ掲げるが、法螺貝の殻の中には竜蛇のような生き物がいると考えられていた。あるいは、そうしたモノたちが住む世界に、貝殻の中は通じている。そう考えられていたことがわかる図である。

<sup>31</sup> 前掲注12、994頁。

<sup>32</sup> 雑賀貞次郎『牟婁口碑集』郷土研究社、1927年、84頁。

<sup>33</sup> 齊藤純「法螺の怪—地震鯨と災害の民俗のために—」筑波大学民俗学研究室『心意と信仰の民俗』吉川弘文館、2001年、208-211頁；前掲注25；齊藤純「法螺貝の妖怪」『怪』vol.0041(ムック)、角川書店、2014年、236-239頁。

一方、近世、京都に在住した本島知辰の見聞記『月堂見聞集』をみると、享保13年(1728)の記事中に次のような話がある。

六月中旬、江州伊吹山より大蛇出て湖水に入、依て宝螺の貝大分飛出て、伊吹の麓の在所二三ヶ村崩る、其後連日風雨不止して、水の高さ三尺餘、村民の床の上へあがる、右は伊吹山の麓の土人の物語也。<sup>34</sup>

滋賀県の伊吹山で、大蛇と法螺貝が続いて出現したということだが、同様の話は他の地域でも聞かれる。昭和59年(1984)の『渋川市誌 第四巻 民俗編』によると、群馬県渋川市川島並木の小名ジャアナに、次のような伝説がある。

前屋敷の上の方、蛇が抜けた穴。七日七晩雨が降り続き、山がうなって水が吹き出した。この時、ホラ貝がうなって先にとんで行き、大蛇がその後を抜け出たといわれる。<sup>35</sup>

平成18年(2006)3月21日、現地を調査したが、同地は「ジャアナ」とも呼ばれ、同じ屋号を持つ家もある。山すその道を下りると小さな谷があつて、その奥に、天と左右を石で囲った四角い穴(縦20cm、横50cm)があり、今も水が湧いている(図7)。

一方、『渋川市誌 第四巻 民俗編』は、渋川市半田の次のような伝説も載せる。

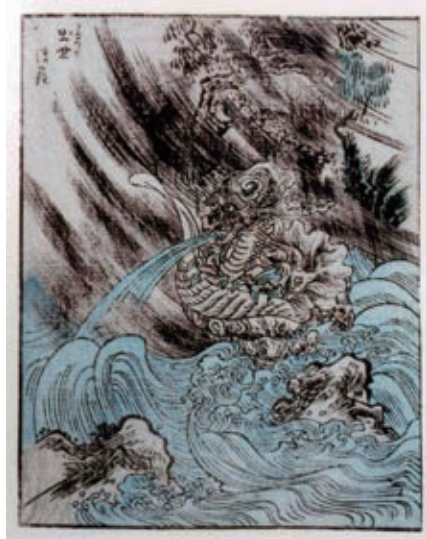


図6 『絵本百物語』「出世ほら」  
(吉田幸一編『怪談百物語』古典文庫、1999年より)



図7 渋川市川島並木のジャアナ  
(筆者撮影 2006.3.21)

<sup>34</sup> 本島知辰「月堂見聞集 下巻」『続日本随筆大成 別巻4 (近世風俗見聞集4)』吉川弘文館、1982年、44頁。

<sup>35</sup> 『渋川市誌 第四巻 民俗編』渋川市、1984年、937-938頁。

午年の貝水<sup>けい</sup> 明治三年の夏のある日、晴天であったが急に水沢山に黒雲が湧きたち大雨となった。滝沢川が大洪水となり、川向うで小物播きをしていた半田の百姓は、二日も家に帰れなかった。この時水沢に大きな岩ぬけがあった。これはこの岩に住む法螺貝が大水にのって海に出たのだと伝えられている。<sup>36</sup>

同地方の法螺抜けは、天明6年(1786)の『山吹日記』にも記されている。これは国学者の奈佐勝舉<sup>な さかつよし</sup>が同年4月16日に江戸を立ち、武蔵・上野・下野をめぐる翌月23日に江戸に戻るまでを綴った紀行文だが、5月1日、現在の渋川市伊香保町の水沢山での見聞として、次のような騒動を記録している。

ややめぐりくれば、山また山の谷間<sup>あひ くみさはだに</sup>を黒沢溪といふ。この日頃谷の内鳴り響<sup>とよ</sup>みて水すべてなければ、ほらの集まり隠れたるが機会<sup>をり</sup>を得て抜け出づべき気ざしなめりとて、人々のいみじうさわぎあひたるが、真光寺の上人にかくと申したるに、大般若経転読ありしとなむ。その法験にや、今日見たれば溪水もや湧き出でたり。かくてそのおそれもあらじとぞ覚ゆる。<sup>37</sup>

真光寺は渋川市並木町の天台寺院。黒沢は水沢山から流れ出す平沢川の一支流だが、黒沢には次のような興味深い伝説もあった(図8・9)。やはり、『渋川市誌 第



図8 渋川市渋川大石の雄石  
(筆者撮影 2006.3.21)



図9 渋川市大野黒沢谷の雌石  
(筆者撮影 2006.3.21)

<sup>36</sup> 同上、894頁。

<sup>37</sup> 『榛東村誌』榛東村、1988年、1003頁。

四巻 民俗編』の記載である。

<sup>おいし</sup>雄石 渋川市立南小学校の校庭西南方隅に大きな石がある。人びとは大石または雄石と呼んでいる。昔、黒沢の奥に夫婦の石があった。ある年の大洪水で雄石は現在の所まで流され、雌石が後から出てくるのをここで待っているのだという。／当時毎夜のごとく雌石を呼ぶ声がこの石から聞えた。里人は「洪水があつては困る」と恐れて、大石の上に田の神と水神様を合祀したほこら祠を建てた。それから後、この不思議な声が止んだといわれる。

<sup>め</sup>雌石 平沢川の上流の黒沢の奥に、雌石と呼ばれる大きな石がある。昔から度々山津波で荒れる平沢川を鎮めたいと、渋川村の人びとは真光寺の僧正に頼んで、この大石の上にくりから不動様を祀った。御神体は不動様の剣に竜が巻かれている。この石は下流にある雄石と同じ石質の夫婦石である。／黒沢谷（渋川）の奥に大蛇が生息していて、村人を襲うので、御神体に蛇身を併祀したといわれる。それ以来、洪水も起らず、谷の草を分けた蛇道も見られなくなり、大蛇を見た者はいないと伝えられている。<sup>38</sup>

平成 18 年（2006）3 月 21 日、これらの石を調査したが、雌石に祀られたくりから俱利伽羅不動尊の石像（縦約 70cm、横約 35cm）（図 10）の背後に、次の銘が記されていた。

天明六年丙午年／願主 渋川邑中／俱利伽羅大  
龍王／四月 吉祥日／石工 織田伊兵衛

伝説によれば、真光寺の僧正がこの不動を祀ったというのだが、天明 6 年 4 月といえば、ちょうど『山吹日記』に記された黒沢谷の法螺抜け騒動の時期である。この騒ぎも真光寺の上人の法力で収まったといい、これらは同じ事件の可能性が高い。ということは、このあたりでも竜蛇と法螺貝は同類だという考えがあったわけである。

こうした怪物たちが、多量の水とともに抜け出てくる世界。すなわち、竜蛇や法螺貝が年久しく同居するような、大地の下の水に満ちた別世界。それがどのような所だと観念されてきたのか、考えてみるべき問題である<sup>39</sup>。



図 10 雌石の俱利伽羅不動尊石像

（筆者撮影 2006.3.21）

<sup>38</sup> 前掲注 35、898-899 頁。

<sup>39</sup> 前掲注 33「法螺の怪—地震鯰と災害の民俗のために—」、189-215 頁；齊藤純「龍と龍宮の

## 6 災害と雨乞い

大阪府の富田林市に、「法螺ん坂」という坂がある。昭和30年(1955)の『富田林市誌』は、「法螺ん坂の法螺貝」と題して、次のような伝説を載せている。

新堂本郷と富田町との中間にゆるやかな坂がある。昔或る時、大雨が降ったおり、この坂の真ん中に雌雄一對の大法螺貝があらわれて人々を驚かした。以来村人はこの坂を称して、法螺ん坂と呼ぶようになった。尚また、その法螺貝は明治三十年(一八九七年頃)頃迄新堂村役場<sup>(ママ)</sup>にあって、正午の時報に用いられたといわれている／新堂には今なおこんなうたが残っている。／新堂越えすりゃ又雨が降る／せめて法螺の坂越えるまで と。<sup>40</sup>

富田林は戦国時代からの寺内町で知られる。その富田林の町の北東に、新堂村があった。近世の新堂は、本村の北新堂と枝村の南新堂の二つの集落からなり、町に接した南新堂は富田村とも呼ばれた<sup>41</sup>。つまり、『富田林市誌』が記す「新堂本郷」は北新堂、富田町は南新堂とみてよいだろう。北新堂と南新堂を東高野街道が南北に通じ、北新堂から見ると、南新堂は寺内町の入口直前の集落になる。さらにその手前に「法螺ん坂」があった。ゆるやかな坂だというのが、大雨で斜面が崩壊し、それが法螺抜けと理解されたようだ。

その法螺貝が新堂村の役場に残り、時報に使われていたという。このように、法螺抜けの貝を手に入れ、いわゆる楽器の法螺貝にしたという伝説の例は他にもある<sup>42</sup>。付近の例をあげると、葛城山地を越えた奈良県側になるが、南葛城郡葛城村(現・御所市)で、次のような話が聞き取られている。「村の法螺貝」という題で、昭和14年(1939)、野村傳四が『旅と伝説』に掲載した報告「南大和の伝説」に収まる。

葛城村は夏になると、他村同様、番水が始まる其合図に吹くのは法螺貝である、この音で何時から何処の田に水を入れると云ふ事が分るのである、以前この法螺貝は金剛山中の一ノ滝という滝の滝壺の中にあつたので有る、何故そんな所にあつたのかと云ふと、最初この貝は大阪湾から、川に入らずと遡り、川の水がなくなった所で、今度は地中に穴を穿ち、丁度金剛山の下を抜けて、

伝承—龍から貝へ—『アジア遊学』28、勉誠社、2001年、88-98頁；同「法螺抜け伝承の考察—法螺と呪宝—」『口承文藝研究』25(2002年)、28-46頁；同「法螺貝あらわる一怪異・妖怪伝承データベースを使う—」小松和彦編『日本人の異界観』せりか書房、2006年、192-214頁；同「東京湾のヌシーこの海、あの山はどのようにしてできているのか—」小長谷有紀編『昔ばなしで親しむ環境倫理—エコロジーの心を育む読み聞かせ—』くろしお出版、2009年、151-168頁。

<sup>40</sup> 『富田林市誌』富田林市、1955年、434-435頁。

<sup>41</sup> 富田林市史編集委員会編『富田林市史 第2巻』富田林市、1998年、561-562頁。

<sup>42</sup> 前掲注39「法螺抜け伝承の考察—法螺と呪宝—」、28-46頁；齊藤純「民話・法螺貝の修業—呪宝の由来・製法譚として—」『説話・伝承学』11(2003年)、74-87頁。



滝壺に出たのだと云ふ。そしたら其時大雨が降って、洪水になり、法螺貝は一の滝から流されて下に来たのを、村人が拾い上げて、中の肉を去り今の貝に仕上げたと伝えて居る、で若しこの貝を失った家は米千石を出して賠償するか財産全部を投げ出さねば済まんので、昔から大事に取り扱われて居る。(辻本源司)<sup>43</sup>

法螺貝が大阪湾から川を遡り、金剛山の下に潜ったという。これは、海・山・川で時を過ごした法螺貝が、大地を抜けて滝壺から現れたということの別表現だろう。

富田林の話にもどると、「大雨が降ったおり」に、「法螺ん坂」に現れた雌雄一対の大法螺貝は「人々を驚かした」という。その雨が災害になるほどのものなら、いくつもの法螺抜けの例のように、大法螺貝は忌まわしい怪物と呼ばれるべき存在である。

一方、同地に関して次のような話も紹介されている。昭和50年(1975)、『富田林の民話(第1集)』に「村をたすけた<sup>ほらがい</sup>法螺貝」という題で掲載された話である。読者にも判断していただきたい点があるため、煩瑣であるが、全文を紹介する。

ある年のこと。—／くる日も、くる日も、かんかん照りつける天気ばかりつづいて、いってきの雨も降らなんだそう。／田んぼの稲は枯れてくるし、川の水はなくなってくるし、それはもうえらいことになってしまった。／そこで村の百姓<sup>ひゃくしょう</sup>たちは、村はずれの坂の上にお祈り所をつくり、まいにちまいにち、／「仏さん、神さんおたのみもうします。どうか雨を降らしておくんははれ」／というて、天をこがすような火をもやし、天の底が破れるようにドンドン、ドンドンと太鼓<sup>たいこ</sup>をうって、雨<sup>あま</sup>ごいをした。／しかし、十日たっても、二十日たっても、なみだほどの雨も降らん。／だから、草も木も、山も、川も、畑も、あかちゃけた色になってしもうてカラカラ。ちよっぴりしかない村の井戸水をうばいあって、あっちでも、こっちでもけんかがおっばじまるしまつ。なんともかとも村は生地獄<sup>いきじごく</sup>になってしもうた。／そのうちに雨<sup>あま</sup>ごいをしている百姓たちのからだもすっかり弱ってしもうて、もう蚊の鳴くような声で、／「仏さん…神さん…もういっぺんだけオカイさんくうて死にとうおます。…そやさかいちよっとだけ…雨…ふらして…なあ」／というて、とうとうみんなぶったおれてしもうた。／ところがそのときだ！／どこからともなく、オスとメスの<sup>うが</sup>いの法螺貝が坂のどまんなかであらわれたかとおもうと、／メスの法螺貝が「プォー」「プォー」／オスの法螺貝が「プォー」「プォー」／と、それはまあ、天にもとどくような大きな声を出してうなりはじめたので、たおれていた百姓たちもびっくりぎょうてん、あわててたちあがってしもうた。／するとだ。なんとも、かんとも、ふしぎなことに、いままでの青い空がにわかにかきくもって

<sup>43</sup> 野村傳四「南大和の伝説」『旅と伝説』12-1(1939年)、21頁。

まっ暗くらになったかとおもうと、ピカッといなづまが光り、ゴロゴロとかみなりさまがなって、タライの水をひっくりかえしたような大雨が降ってきた。—／「わあい、雨や、雨や、雨やでえ」／というて、百姓たちのよるこんだこと。よるこんだこと。みんなすっかり元気になってしもうて、おどりだしたわな。—／プォー、プォーのピーカピカ／プォー、プォーのゴーロゴロ／ゴロゴロゴロのジャーブジャブ／法螺貝の声、稲妻の光、雷、太鼓の音、雨の音にあわせて、それはにぎやかなこと。みんな…ぐしょぐしょ、びしょびしょになっておどりくるうたわな。—／それからいく日も雨が降りつづいて、山も川も田んぼもよみがえって豊年満作ほうねんまんさく。もとの平和な村にもどった。／そこで、村びとたちは、／「あの法螺貝は、わしらの村をすくってきたいのちおんじんの恩人や」／というて、村むらの長おさの家の床とこの間に二匹の法螺貝をおいておまつりしたそうまな。／それからだれいともなく、村はずれのあの坂ほらのことを“法螺さかん坂”と呼ぶようになったという。／(註)法螺坂は、市内の若松町一丁目と二丁目の丁界にある。<sup>44</sup>

ずいぶん長い紹介になったが、潤色の跡は明らかだろう。不自然なセリフや情景描写が目立つ上、話者・執筆者ともに表示はない。末尾の(註)に付記された「法螺坂」の場所は、『富田林市誌』の「法螺ん坂の法螺貝」とほぼ同じ場所である。つまり、執筆者が「法螺ん坂の法螺貝」を材料にした可能性がある。一方、「村を助けた法螺貝」では、法螺貝はまさにその題名通り、村人の願いをかなえた救世主になっている。あるいは、法螺坂での異変をもとに、こうした形の伝説が口承されていたのかもしれないが、いずれにせよ、現時点での確認は難しい。

原話の有無や潤色の判定は重要な問題だが、ここでは、同じ法螺坂で大雨を降らせた法螺貝の像が、二通りに展開しえたこと、その実例が得られたことに注目したい。つまり、洪水・土砂崩れといった災害を与える法螺貝と、干天の慈雨といった恵みを与える法螺貝の二つである。そして、「村を助けた法螺貝」が、事件の前提として、早魃さつの苦しみを纏る々記述しているように、多量の水が望まれる状況であれば、法螺貝は救世主となる。一方、それが度を過ぎたものとして忌避される場合には、法螺貝は怪物になる。普段は後者の場合が多いと考えられるが、いずれにしろ法螺貝は、竜蛇と同様、水を左右する存在として人々に認識されているわけである。そのことが、法螺坂の伝説の実例で明らかになった。

## 7 水止舞の大貝

こうした観念を表現したとみられる祭がある。

<sup>44</sup> 『富田林の民話 (第1集)』富田林民話研究クラブ、1975年、31-34頁。

東京都無形民俗文化財に指定されている大田区大森厳正寺の水止舞<sup>みずどめ</sup>は、珍しく雨を止めるための獅子舞である。獅子は竜頭の三頭獅子で、毎年7月14日、厳正寺の境内に作られた舞台で奉納される。これに先立って、演者たちは少し離れた所から寺に向かって「道行」の行列をする。

その中に雄雌の「大貝」または「竜」と呼ばれる、人が中に入った二体の作り物が登場する。これに入る人物は、背中に竜を描いた白衣を着て、手に大貝（法螺貝）を持つ。そして、藁縄製の竜を筒状に巻いた物に入り、数人がかりで運ばれていく。その間、大貝（竜）は法螺貝を吹きまくり、雨のように水を浴びせられる(図11・12・13)。大貝は舞台に着くと解体され、その藁縄で土俵のように舞台を取り囲む。中にいた人物は舞台に立って法螺貝を吹き鳴らし、こうして獅子による水止舞が始まる。あたかも法螺貝が激しい雨とともに出現し、殻を抜けて竜になって昇天し、晴れ間が訪れる様を表しているかのようである。

この舞は、「水止」とはいいながらも、雨は農民に必要な不可欠なもので、古老によると昔は雨乞いの意識が強かったという。『大田区の文化財 第15集 郷土芸能』には、「わらづくりの竜と獅子頭が両方の機能をそれぞれ分担しているのであろうか」と記されているが、注目すべき見解である<sup>45</sup>。



図11 水止舞 大貝（竜）の藁縄  
(筆者撮影 2013.7.14)



図12 水止舞 大貝（竜）の藁縄に入る  
(筆者撮影 2013.7.14)

<sup>45</sup> 社会教育課社会教育係編『大田区の文化財 第15集 郷土芸能』東京都大田区教育委員会、1979年、15頁。



図13 水止舞 大貝（竜）の道行  
(筆者撮影 2013.7.14)

水止舞の由来は、明和7年（1770）の『巖正寺由緒補鑑』や、文政9年（1828）の『新編武蔵風土記稿』巻之四十一荏原郡之三に記されている<sup>46</sup>。両者の内容に大きな食い違いはなく、それらをまとめた水止舞保存会のパンフレット『奉納 水止舞縁起』を参照し、舞の起源譚を概観しよう。

元享元年(1321)、巖正寺<sup>ほうみつ</sup>二世法密上人の時、武蔵国<sup>かんぼつ</sup>に大旱魃があった。人々は上人に雨乞いを願ったが、上人は再三辞退した。が、たつての願いにより、上人は稻荷明神の像を彫って社に納め、藁で竜神の形をつくり、七日間の祈祷の後、海に舟を浮かべ、竜を水に沈めた。すると、竜は泳ぐように波間に消え去った。上人は、大願は成就されたと仏前で謝恩の経を読むと、雨が降り出し、人々は喜んだ。ところが、二年の後、元享三年三月から数十日間雨が降り続き、大水になった。これは上人の祈祷の禍<sup>わざわい</sup>だとして上人を恨むものが多かった。そこで上人は人々を集め、再び神仏に祈祷することを告げ、三頭の竜を彫って「水止」と呼び、仏前で経を読み、郷民に水止の竜像を冠<sup>かむ</sup>らせて舞い、太鼓を叩き法螺貝を吹かせた。すると、雲が晴れ日光が輝き、人々は上人の徳をたたえて喜んだ。それ以来、寺に水止の舞を奉納するならわしとなった。

この由来に語られた、上人が最初の雨乞い用に作った藁の竜が道行の大貝（竜）に、次の水止め用に作った三頭の竜が獅子舞の獅子に、それぞれ対応するものだろう。

ところで、水止舞を実施する人たちは、「大貝」を竜だと考えている。「大貝」と

<sup>46</sup> 前掲注45、14-20頁；大田史編さん委員会編『大田区史（資料編）寺社1』東京都大田区、1981年、6-7頁。

いう呼び名はその中の人物が吹く大貝（法螺貝）に因むものだという理解である。しかし筆者は、各地の法螺抜け伝説を検討し、風雨とともに現われた法螺貝が竜蛇になった、あるいは竜蛇と法螺貝は近縁だという観念の存在を知ることができた。そのような筆者の目から見ると、「大貝」はまさに竜蛇になる前の法螺貝に見える。

法螺貝や竜蛇は水の禍福の支配者である。そうしたモノの棲む世界が、海の底、川の中、大地の下などにある。機が熟してそれが出現する時、水の災害や恵みを人間に与える。蛇抜け・法螺抜けは、そうした考えを示す伝説である。